
2. 谷中の育て方－住民と専門家が共同で谷中の住まいや町並み等の住環境・生活文化の良いところを発見し、これから谷中のまちや住まいづくり、暮らしに活かしていく方法を開発、実践する。(住民主体の環境形成プログラムの開発と実践)

やなかがっこう
谷中学校

(東京都台東区)

I. 活動の目的と背景

台東区谷中界隈をベースに、"町のプロ"である住民と若手専門家が協同する形で、まちづくりグループ「谷中学校」が生まれ、もうじき5年目を迎えます。当初、何も分からず「寄り合い座談会」を中心としたイベントが主でしたが、蒲生家再生となり「寄り合い処」として拠点を持つことができました。ここができたことにより、文字通り"寄り合いの場"ができ、会員間はもとより、町の人たちとの交流の接点となりました。

そして、これと前後する頃に会員の野池さん（三崎商店会会长）より「"谷中小学校前の小公園"や"初音派出所"の建設に対し、町会と商店会として区と警視庁に要望を出したいので専門家の立場からまとめ役をしてほしい。」との申し入れがあり、町のシンクタンクとしての役割を少し果たすことができました。また、町の人からの建替え相談も受けるようになりました。谷中学校のあり方が見えはじめました。平成4年には、台東区役所の中でも応援してくれる方ができ、「下町型住宅のあり方の調査」を若手専門家のメンバーで行うことになりました。これは、直接の谷中学校への委託にはなりませんでしたが、こうした専門家としてのノウハウを活かすことによる谷中学校のあり方と自立の道がまた一つ模索されました。

そうした経緯の中、今回の助成により谷中学校という組織のあり方と存続の仕方（経済的な意味も含め）を、活動を通じ考える機会ができ、また、谷中学校は次のステップに進んだ気がします。

II. 内容と方法そして課題

この一年に行ってきた活動について、(1) メディアづくり (2) 拠点づくり (3) 町や行政との交流の拡大 (4) 調査・研究 の4点を軸に、概略を報告します。さらに、主だった個々の内容の詳細に関しては、今後の課題の後に記述します。

1. メディアづくり

当初メディアづくりの中心と考えていた「谷中事典」づくりは、あまりうまく進めることができませんでした。これまでの調査の整理や地域雑誌"谷根千"の項目分類等多少進めたものの、片手間ができるものではなく、適切な人材が見つけられなかったためです。

一方、実際につくったメディアでは、谷中リサイクルマップやアートロードマップ、谷中マップ等の地域の活動を地図化したものが有効でした。まず、より多くのまちの人に地域の情報を提供するには、大規模な事典より場所やテーマ別の地図の方が適しているようでした。もっとも、これが成功したのは主に前田さん兄弟というパワフルな活動家が絵地図づくりを手がけ、配布した力によるものです。

新局面としては、今年多くのテレビ等の取材を受けましたが、運営会員個々の活動も取り上げられ一つの活性剤としての役割を果たしました。しかし、こちらの主旨を理解しない報道もされ、迷惑を受けた部分もありました。マスメディアの活用は多くの人に活動を理解してもらうには有効ですが、こちらが主導権をいかにもって誤解を生まないものにするかが課題となります。

－活動項目－

- ・「谷中事典」づくりのための資料整理
- ・マップの作成 谷中マップの改訂+根津、千駄木マップ・谷中リサイクルマップ／谷中ART ROAD '93.10
- ・チラシ：谷中学校って何？（谷中学校の活動概要）
- ・活動内容のパネル化（A2×50枚5周年展で展示）
- ・下町型住宅のあり方1993のスライド化（5周年展示住まい談義）
- ・マスメディアの活用 NHK、建築文化、ア クロス等

2. 拠点づくり

「谷中学校寄り合い処」は、これまで家賃を払うため一部の会員の事務所と兼ねていましたが、今回の助成により谷中学校のみの使用に変え、「寄り合い処」としての位置づけが明解となりました。そして、「まちかど資料館」に成長させようとしたが、実際行おうとすると様々な課題が浮き上がってきました。

一つは「谷中学校寄り合い処」に常駐する人は、誰でも良いのではなく、その適性が意外と難しいこと。下手に地元の人、特に年配の人だとこれまでの人間関係があり、ある意味で寄り合い処に訪れる人を選ぶことになります。かえって地元の人と白紙の状態の人、学生や移ってきたばかりの若い人のほうが良いのではと思います。そして、なにより谷中学校の主旨を理解し、バランス感覚の良い人、人の話を聞ける人である必要があります。今回、解説員という形でアルバイト代の助成も受け、学生会員で試行もしてみましたが、なかなか探しませんでした。また、アルバイト代を支払うということも、当面、多少人は来てくれますが、本質的でないようですし、無給の運営会員との関係も難しい問題が生じます。ただ、まだよく方法等分かりませんが活動のある部分（どの部分かも分かりませんが）にはきちんと価値付けられ、報酬が必要だとも思います。

もう一つは、何をどこまで「まちかど資料館」として、公開していくかということです。当然管理の問題も含め考えていかなければなりません。これは現実に試行していかなければ分からぬ問題もあります。そして、一方では、「本当にそうした役割が今の『谷中学校』の段階で必要か、できるのか、それよりも、町の中で起きている様々な場所と動きをネットワークすることのほうが面白いのではないか。それこそ『まちかど資料館』なんじゃないか」という意見もされました。

－活動項目－



谷中学校寄り合い処

- ・寄り合い処の「まちかど資料館」への試行
情報、資料の収集、整理、ファイリング化／建替えのための基礎情報をコンピュータに入力／運営会員、学生会員による解説員／会員の作品の展示
- ・町の中での拠点のネットワーク化－「まちかど資料館か？」
寄り合いの場：谷中学校寄り合い処／パーティー、ミーティング会場：澤の屋旅館食堂／イベント、展示会場：柏湯、アートフォーラム谷中、すぺーす小倉屋／リサイクルバザー会場：寄り合い処、かなかな、関さん路地／作業場：菊池工務店、あずさ工房など

3. 町や行政との交流の拡大

今年度は谷中学校にとって関わりの深い「すぺーす小倉屋」「柏湯；SCAI THE BATHHOUSE」という二つの特徴あるギャラリーができ、それそれで、「芸工展」「5周年展」を催すことができました。「芸工展」では運営会員の前田さん兄弟を中心に、谷中界隈のプロ、アマの芸術家の作品を一堂に集め、多くの町の人に楽しんでもらいました。これまでの難しいことをやっていると言われてきた谷中学校とは違った側面が打ち出せました。これは、前田さん兄弟の強いキャラクターがあったからこそできたことであり、後に「千駄木塾」(詳しくは「III. 結論および考察」で)として暖簾分けしていくきっかけにもなった企画でした。そして、「芸工展」により、この町にいかに多くの多芸多才な人たちがいるかということも発見できました。

「5周年展」ではこれまでの活動展示の他、音と映像でめぐる世界の旅、谷中住まい談義、寄席を行いました。「芸工展」に続き「5周年展」によって谷中学校も町の人に親しまれ理解されたような気がします。そして、なにより自分たちも町の中でこんなに楽しいことができるんだと原点に帰ったようです。

－活動項目－

- ・第1回芸工展 於：すぺーす小倉屋
- ・谷中学校5周年展（台東区まちづくり公社後援） 於：柏湯
- ・リサイクルバザーの開催 ネットワーク化
- ・諏方祭への参加 天茶町会の神輿かつぎ、寄り合い処でのふるまい酒
- ・下町まつりへの参加 運営会員前田さん兄弟の作品展示、谷中ART ROAD'93.10の発行協力



第1回芸工展

4. 調査・研究

運営会員の個々の地道な調査研究も谷中学校の重要な活動の一つです。また、谷中界隈に関する調査研究を支援、協力していくのも役割の一つと考えています。その際、成果物は寄り合い処にも寄付してもらうようにし、谷中界隈の研究を蓄積したいと思います。そして、学生が活動に参加することも谷中学校の大切な刺激になっています。

一方、谷中学校の専門家メンバーが、台東区より委託された「下町型住宅のあり方の調査」は

谷中学校にとって新たな契機となっており、まだ、不明瞭ですが谷中学校のあり方、役割そして存続の仕方のヒントとなるものです。

－活動項目－

- ・谷中の石工”廣群鶴”の調査（運営会員 加藤氏）
- ・谷中の町並みの記録
- ・下町型住宅のあり方調査
- ・学生会員卒業制作・修了制作支援、博士論文研究協力

5. その他

- ・全国町並みゼミへの参加（川越大会）
- ・谷中学校路上教室（川越、千住宿）
- ・谷中学校まちかどコンクール

III. 結論および考察（今後の展開にむけて）一谷中学校の役割一

1. 会員の元気おこし

谷中学校の役割の一つとして、会員個々の活動の価値付けというのがあるようです。谷中学校の会員は谷中学校ができる以前より、谷中となんらかのかかわりを持ち活動をしていた人たちが多いのですが、それでも、それぞれ個人で活動しているだけでは、今ひとつ元気が出ない。個々の人の活動を谷中学校という仲間が価値付けることにより、自分の活動が見えもするし、元気にもなれる、精神的支えとも言える役割が谷中学校にはあるようです。変な言い方ですが谷中学校のお墨付きが自分にも要るし、まちの人に対してもやっていることを言いやすいという状況があるようです。

かといって、元気付け合い皆で和気あいあいと一つのことをやるというのも谷中学校の体質には合っていないようです。今まで個人で活動していた人が多いだけあって、良く言えば個性的、悪く言えば頑固じじいやばばあが多く、なかなかまとまって動くのは難しいようです。

2. 顔としての専門家集団

谷中学校がもう一つ谷中の人たちに期待されている面があります。それは、専門家集団としての役割です。しかし、それは、単に専門的な知識や情報が欲しいということだけではなく、専門家集団だからこそ、まちを繋ぐことができるということのようです。会員の野池さんのように町会や商店会の会長をやっているいわば谷中の昔ながらの体制の中にいる人にとっては、何とか新風を吹き込んで欲しいという気持ちがあるようです。それには純粋な若いお母さんたちの集まりのよくいう市民グループがまちづくりをやることではなかなか難しいようです。町会や商店会は、まちづくりは自分たちがやっているという意識が強いし、実際、台東区の場合、行政と町会や商店会の結びつきは強く、影響力もあります。そうした中、谷中学校が町会や商店会に受け入れられているのは、若い専門家の人が家や町並みのことをやっているのだというイメージが強いので、自分たちと競合しないだろうと考えている点があるのでしょう。もちろん、会員の中に町会の関係者がいるのも大きな要因です。

一方、前田さんや谷根千工房の森さんなど、若いやる気満々の人たちにとっては、なんとか、行政や町会、商店会など現在の体制に対し、食い込んでいって欲しいという気持ちもあるよう

す。少し荷が重い気がしますが。

そうした期待の中、谷中学校の一つの顔として専門家集団を演じる必要もあるようです。しかし、このことは、結果として出てきたことで、本来、ちゃんと専門家としての活動をし、専門家としての役割を本当に、果していかなければいけません。

実際、これまでの”谷中小学校前の小公園”や”初音派出所”の建設に対し要望へのサポートにしても、個人の建替え相談にしても、本当に町の中という身近なところに、相談にのれる専門家がいる必要がひしひしと感じます。町の人の声にならない声(つぶやき)を拾え可能性を持たせることを実現していかないと、何かよく分かりませんが大きな波に流れ、谷中の町でなくなるような気がします。

そして、今回もう一つ専門家集団の役割という点で大きなことがありました。平成4、5年と行った「下町型住宅のあり方に関する調査」がです。これによって、行政との窓口が開かれたとともに、地域での活動のあり方の可能性が出てきました。成果物としても、”下町型住宅絵解き知恵袋”というものもできましたので、これを使って今年、谷中でどう展開できるかも谷中学校の専門家集団としての真価が問われるところでしょう。

3. 中空ネットワークづくり

ここまで、谷中学校の役割として「会員の元気おこし」「顔としての専門家集団」の二つについて述べてきましたが、ここからは、この二つを踏まえ、今年度見えてきた谷中学校の方向性について述べたいと思います。

谷中学校の主な活動の一つである「寄り合い座談会」は、これまで、自分たちの調査研究や他の地域での事例等の発表会的要素の強いものでしたが、今回行った「芸工展」「5周年展」は町の人が参加してきたという感が強く、谷中学校もやっと町の人とまじわる事ができました。それとともに町の人の持っているパワーが再認識され、こうした活動がこれから谷中学校に必要な部分ではないかと強く感じました。



寄り合い座談会 谷中すまい談義



そして、谷中学校の組織のあり方としても、運営会員も固定化してきていることも含め、新しい工夫が必要な時期にきていているのではないでしょうか。様々な企画を実行するにも今の谷中学校だけ、それも若手専門家が主というのでは、もはや限界であり谷中学校とはそんなものでもないだろうと思います。せっかく、今年ってきたイベントの中で見出せた数多くのパワーのある町の人たちの力を活かさない手はありません。もっと谷中

学校としては自分たちですべてやろうとするのではなく、それよりもっと広く町の人が参加でき、町の人の持っているパワーを引き出す、発揮できる場や機会をつくるといった仕組みが大切です。今まで目的不定型として何をやっているのか曖昧であったりしたのも、町の人が新たな参加がしにくかった原因でしょう。それには、谷中学校の目的不定型は残しつつ、イベント等の時に企画ごとに内容をはっきりさせ、参加者を募るということも考とを考えても常に新しく組み直し、そうした中で様々な人やグループとネットワークを組むというやり方があるのではないかでしょうか。こうした考えも今年4月に、主要メンバーの前田さん兄弟の「千駄木塾」結成という、いわば谷中学校からの暖簾分けといった出来事で、谷中学校の方向性として現れてきました。前田さんとしても谷中学校という母体は必要なものの何か谷中学校で行うにしても、頑固じいやばばあの他の会員の意見も気になる、もっと自分だけの考えで動ける場も欲しいということでした。今後も姉妹校として谷中学校と芸工展等行う計画です。そして、前田さんのところだけでなく谷中にある色々なグループと支援し支援される自由な関係づくりで、パワーアップができるのではないかでしょうか。

谷中学校のこうした役割は「中空ネットワークづくり」とはいえないでしょうか。谷中学校本体は、専門家集団という顔は持っているものの何か曖昧な存在にしておき、けれども、どこか、まちの人それぞれ谷中学校と関係を持っている、という仕組みはどうでしょうか。そして、こうした仕組みには谷中学校の存在を感じさせる“寄り合い処”的存在も大切です。

まちかど資料館にても当初のとても狭い意味での情報の発信所だけでなく、町のあちこちに色々な機能を持った場が町の人により行われていることが面白いのではないかでしょうか。他区で見られるような集中型のまちづくり情報センター等は行政に任せ、分散型のまちかど資料館、展示場、寄り合い処、映画館、劇場等といった名所（ひとと場）づくりです。

そして、もう既にできている人やグループを基に、「中空ネットワークづくり」がこれからの谷中学校の役割の大きな部分を占めるでしょう。

4. 第2回芸工展の目論見

その第一歩の試みとして、今年は「第2回芸工展」を考えています。昨年「第1回谷中学校芸工展」ということで「すペーす小倉屋」を会場に町の人たちの作品の展示を行いましたが、今年は、それを一步進め、一案として次のようなことを考えています。

作品は、昨年のような絵画、陶芸等も含めますが、谷中にふさわしく和菓子や煎餅、べっこう、象牙、大工等職人さんの手仕事も作品とします。そして、会場は町全体として、できるだけお店の人はもちろん、作者の住んでいる家、もしくは近くで展示できるようにします。幸い谷中には仕舞屋が多く、使用していないショウウインドウを使わせてもらうのも手かと考えています。それらのルートマップをつくり、まちの人や訪れた人に、まちを楽しんでもらおうという企画です。

このような方法を取ることで、より多くの人が気軽にかかわれるということができ、そのことが重要となります。そして、谷中に昔から根付いている芸術という“道具”によって、新旧問わず、町の人同士のつきよりも広がり、輪をつくることができるのではないかと考えています。

これを今回は、谷中学校のみで行うのではなく、「第2回芸工展実行委員会（仮称）」として、企画の段階から色々な人を巻き込めばと考えています。